

# 備陽史探訪

第68号

発行

 備陽史探訪の会  
 福山市多治米町5-19-8  
 TEL(0849)53-6157

## 久代宮氏の出自について

会長 田口 義之

戦国時代、現在の比婆郡東半に当たる旧奴可郡一帯を支配した有力豪族に、久代宮氏がいる。

県内有数の中世山城跡、西城大富山城、東城五岳岳城の城主としても有名な同氏については、今まで主に「久代記」(注①)を材料にその叙述がなされてきた。同書は江戸初期の成立と言われ、同氏の研究にはなくてはならない文献である。しかし、その内容には問題点も多い。特に、戦国期に活躍した高盛以前の系譜には疑問がある。

「久代記」によると、久代宮氏は元大和国宇陀郡の武士で、初代宮弾正左衛門尉利吉が応永年間(一三九四～一四二八)、備後国奴可郡久代(現比婆郡東城町久代)に配流されたことに始まり、以後景英・利成・息成・景行・景友と相続し、七代上総介高盛に至ったとある。ところが、

宮氏は、備後生え抜きの国人衆であって、南北朝時代には既に旧奴可郡に勢力を伸ばし、久代には応永以前、宮氏の一族が土着していた形跡もある。つまり、同書によれば、久代宮氏は、同じ宮姓を冒しながらも、備後屈指の大豪族宮氏とは無関係、ということになるのである。

勿論、その可能性がない訳ではない。しかし、「備後古城記」の原本と推定される「水野記」所収の「御領分古城主」を見ても同氏の記載は「宮久代」とあって、他の宮一族の記載となんら変わるところがない。やはり、宮姓を冒すからには同じ一族と考えるのが妥当であろう。

また、高盛以前の六代に関しては、その実在を示す確実な文書・記録は一切残っていない。

「久代記」の高盛以前が信用できないとすれば、その出自を他の宮一族に求める必要がある。私はこれを室町期に幕府奉公衆として活躍した宮氏の一方の主流、「宮上野介家」に求めたい。その理由は、次の通り

である。

まず、久代宮氏は戦国期、「源姓」を冒している(注②)が、宮一族の中で「源姓」を称したのは、宮上野介家の一門のみである(注③)。

また、戦国中期の天文年間(一五三二～一五五五)を境にして、旧奴可郡域の支配者は宮下野守家から久代宮氏に変わるが、「大館常興日記」天文十年(一五四二)八月四日の条によれば、それは下野守家の断絶と宮彦次郎によるその遺跡の「切取」という事態を受けてのことであった。そして、大内方として宮下野守家の所領を押領した「宮彦次郎」こそ久



久代宮景盛の老臣山城守盛勝画像  
(比婆郡西城町浄久寺蔵)

代宮氏に外ならない、と考えられるのである。宮彦次郎は室町期に幕府奉公衆に名を連ねた宮氏の一族で、仮名「彦次郎」は宮上野介の一門であることを示している(注④)。

以上のことは、「山内首藤家文書」二一六号山内隆通條書を検討すれば、よりはっきりする。同條書によれば、山内隆通は「宮家并東分小奴可」など久代宮氏の押領した地一切の領有を毛利氏に要求し、元就の承認を得ているが、隆通は久代宮氏の領有する「備中八鳥山之儀(現岡山県阿哲郡哲西町)」は要求しないと述べている(注⑤)。これは「平賀家文書」

年次三月二三日付陶興房書状に言う

「備後両宮并備中衆」が山内直通・大内氏の支援を得て「野部新城・八島両城切捕由」という出来事に対応すると考えられ、山内氏としては自己の承認した所領は要求しないと言うことである。つまり、この「両宮」こそ久代宮氏の先代に当たる訳で、「両宮」を宮上野介家の一門と考えて良い(注⑥)とすれば、前述の仮説が立証されるわけである。

注② 比婆郡西城町浄久寺蔵の『宮景盛寿像(永禄十年の銘あり)』によれば、景盛の祖父高盛は本来藤原姓にもかかわらず源姓を称したとあり、景盛の父興盛、その子智盛、一族と推定される親盛・尚盛にその徴証がある。

注③ 『萩藩閥閥録』巻八十三有地右衛門書出に、宮上野介家の祖兼信の嫡子氏信は尊氏より「氏」字を頂戴し、一代限り「源姓」を称することを許されたとある。

また、『応永度大嘗会関係文書』によれば、氏信の次男氏兼は、「源氏兼」として称光天皇の大嘗会に奉仕している。

注④ 『文安年中御番帳』(群書類従

所収)に「四番宮彦次郎」、

「康正二年造内裏段銭并国役引付(同上)に「二貫文、宮彦次郎殿備後国三箇所段銭」とある。

宮上野介と同じく四番衆に属していることと、同家と同じく「次郎」を假名(満信の子息と推定される上野介教信の假名は「又次郎」である。『永享九年行幸記』(群書類従所収)として

筋で、或いは上野介満信の弟である氏兼(『山内首藤家文書』八三号等)が彦次郎家の初祖と考えられる(注⑥参照)。

注⑤ 『国郡志御用ニ付郡辻差出帳坂可郡』によれば、哲西町野部の四王寺は、天文三年(一五三三)、宮上総介盛親(高盛)同息兵庫助興盛の再興と伝え、また、『備中府志』によると、同地の西山城には天文年間、「久代弾正」が居城したと言う。

注⑥ 宮上野介家の祖兼信の孫と推定される満信・氏兼(前述)は、各々次郎左衛門尉、次郎右衛門尉を称しており、両人の子孫が備後両宮と呼ばれた宮若狭守・同五三郎(『小早川家証文』二〇二号等)と考えられる(注④

参照)。

### 秋天に戦国の残光を求めて

一泊旅行に参加してー 亀井 勇

備陽史探訪の会に入会して早や三年が過ぎた。昨年の一泊旅行は、謎の多い「荒神谷遺跡」外、今なお記憶に新しいすばらしい旅行であったが、今年は私にとって二回目の参加となった。

十月一日、二日間の二日間、快晴に恵まれて、私たちは歴史の宝庫、近江・越前へと出発した。

新幹線で米原着、近江鉄道バスに乗車。最初の目的地、姉川古戦場へと向かったのは、総勢四三名(内女性一七名、男性二六名)である。

この二日間講師をされたのは、お馴染み末森清司さんで、例の熱のこもった口調は、私たちの史跡への関心を一層盛り上げることとなった。

末森さんは私たちと同じ会員だが、仕事の都合で一年半程前米原に移住された。以来、毎日曜日に、近辺の史跡巡りをするのを唯一の楽しみにされているほどの愛好家である。その豊かな知識と情熱が、私たちにひしひしと伝わってくる。

姉川古戦場  
元亀元年(一五七〇)の史上名高い姉川の合戦は、越前の朝倉義景と近

江の浅井長政の連合軍が、織田信長およびそれを支援した徳川家康の軍勢と姉川(野村橋一帯)で激突した死闘である。織田側の勝利に終わったとはいえ、野も田畑も死骸が累々、姉川は血に染まったと云われている(両軍の死者は二千五百人とも)。

徳川方の支援がなければ、浅井・朝倉側が勝っていたとも云われ、もしそうであるならば、日本史はどのようにならうかと思いをめぐらせた……。

今はただ「古戦場跡碑」と「案内板」が当時を伝えるのみの、全国どこにも有りそうな田舎の風景であった。

小谷城跡  
戦国時代(一四九〇～一五九〇)の五指に入るほどの山城で、浅井家三代の居城である。姉川の合戦に敗れた浅井長政が、三年余の籠城の後、織田軍の総攻撃で落城したと云われている。

私たちはリュックを背負い、スニーカー履のいでたちで、本丸までの比高二三〇米と云われる坂道を登った。登るほどに次々と曲輪が現れた。出丸一金吾丸一番所一御茶屋一馬

出丸一金吾丸一番所一御茶屋一馬

洗池(番所から城内主要部となる)―大広間―本丸―中の丸―刀洗池―京極丸―山王丸等々、四〇分位は登ったのだろうか。

途中、空堀・土塁・曲輪などの説明を聞きながら、その規模の雄大さに驚かされる。それにしても、信長の妹お市の方と長政が、この山城で過ごした幸せだった日々のことが頭をよぎる。

山頂あたりで弁当を開く。ここでの味は、また格別。

少し下った所に長政が自刃したと云われる場所があった。朝倉氏との同盟を重視するか、兄信長と共に戦うべきか、二九歳にしては、余りにも厳しい選択で涙するところ。

下山しながらも、戦国の世の常とは云え、戦いに敗れた一族、および家臣と子女達の悲痛な叫びが、聞こえてくるようであった。落城の際、救い出され生き永らえた、お市の方茶々、初、小督が、それぞれの道を歩むことができたことに、救われるものを感じた。

なお、この小谷城では、地元の教育委員会から派遣されたボランティアガイドの方が、分かりやすく説明して下さったことは有難かった。

彦根城

彦根城と云えば、幕末、幕府の運

命を一身に背負い、非業の死を遂げた井伊直弼のことしか意識しなかったが、関ヶ原の戦いに徳川四天王の一人として功績のあった、井伊直政の子直勝が慶長八年(一六〇三)に築城して以来、約二六〇年間、井伊家三五万石の居城であった。

天守閣は現在改築中で、工事中のテントに覆われて全容を見ることができなかったが、外にも多くの遺構や庭園等があり、「散策の道」に沿って城内を一巡する。

特に、彦根城博物館は、井伊家伝来のコレクションが展示され、武器をはじめとする美術工芸品や古文書などを見学した。

宿泊

彦根簡易保険保養センターに一泊する。

酒宴は、平田さんの名進行ぶりと相俟って、歌謡コンサートながら、相互の親睦を一層深める。

多賀大社

年間三〇〇万人が訪れると云う。伊邪那岐・伊邪那美の夫婦神が祭神で、古事記にもその名が見え、著名な武将の崇敬も受けていたと云う。古文書も多数現存しているとのこと。

境内には「寿命石」があつてこれをなでると延命の願いが叶うとのことで、二度三度なでたが、結果やい

かに。

なお、多賀大社については、備陽史の会報六三号に「近江断崖―多賀大社をめぐって」と題して、平田さんが詳しく記述されていたのが参考になった。

一乗谷遺跡

戦国大名朝倉氏が五代一〇〇年の間、城館を構えたが、天正元年(一五七三)朝倉義景が織田信長に敗れた際、灰燼に帰した。その後四〇〇年以上もそっくり埋もれ、現在まで遺された遺跡である。

昭和四二年から発掘調査がすすめられ、一乗谷城を含めて国の特別史跡に、庭園は特別名勝にも指定されている。

私たち一行は資料館の後、朝倉館跡―湯殿跡庭園―諏訪館跡庭園―復原武家屋敷等々を見学し、中世城下町に遡ったような錯覚にとらわれた。徳源院(清滝寺)

近江源氏佐々木京極氏の天台宗の墓所で、中世この地方を本拠に活躍した一族の初代氏信以来、菩提寺として葬られたところである。

累代当主の墓三十四基の巨大な宝篋印塔が、本堂の裏山を削って造られた白壁の土塀の中に残されていた。一地方豪族の墓が、このように現存していることに奇異の感を抱いた。

以上、このたびの一泊旅行記を書いたが、内容は雑駁である。

しかし、歴史について殆ど無縁であった私が、自分なりの知識を得、感動し、また同行の会員の方々との親睦を深めることができたことは、備陽史探訪の会へ入会した「たまたま」と有難く思っている。

最後に、このような旅行を企画し、下見し、周到な準備をされた方々は頭の下がる思いがする。

会員の一人として、この会を継続して発展させるための協力は、惜しまないつもりでいる。

『古事記』を読む

来年のことをいうと鬼が笑うといいますが、会の行事初めは「古事記を読む」からです。

この学習会も二年目に入りますが、なかなか前へ進みません。引き続き天照大神と須佐之男の神話について勉強します。

△実施要項▽

- 日程 一月一三日(土)
- 会場 中央公民館会議室
- 時間 午後二時～四時
- 座長 神谷和孝さん
- 平田恵彦さん
- 費用 資料代として一〇〇円程度

郷土芸能

蔵王はね踊り勇壮愉絶に踊りゆく

柿本光明

風の鳴る夏の日に、白地の浴衣に鉢巻・櫛・黒の手甲に脚絆をつけ、草鞋を穿った「鬼」と称する歌い手若干名と、同じ衣裳の「鉦」「小太鼓」「大太鼓」の三種の楽器の奏の奏に合わせて踊りながら畦道を行く。「はねおどり」は、そもそも福山藩備後領内の各地にあったものと思われ。伝承によれば、元和五年（一六一九）水野勝成が福山藩主として

治三年に造り替えられたといわれる諫鼓の文字や、加茂町広瀬に存在する文献には、明治の中頃、すたれかかった芋原地区の「はね踊り」を蔵王町に習いにゆき復活させた、と記載された資料があるという。これから判断すると、すでに江戸時代には踊られていたものと推測される。

入部した際、この踊りを賞して、領内各村に楽器を与えて奨励したといわれる。おそらくそれ以前からあったもので、本来は農村の虫送り、雨乞いなどの民俗的な行事であったであろう。

やわらかな若菜は、いつかおどろおどろしい茂みとなって、風に煽られて、騒がしくしておる。

昼の長い頃である――。

今の蔵王町には上井手川の南に広びろと続いた水田も、石道の道筋も、水田は埋め立てられ、家々が建ちな

らび、昔の風景はあとかたもない。蔵王の町で継承され、蔵王で踊られている「蔵王はね踊り」は古い歴史を持っていることは間違いない。明

れるように、蟬があちこちで鳴き始めた。道はたちまち乾いて、土埃が舞い上がる。

浴衣に青玉入りの櫛をかけ、白鉢巻をしめ、股引をはき、黒地の手甲、黒の脚絆、白足袋に草鞋という軽いでたちで、直径二尺の大太鼓（大胴）を白布で縛ってからだの左側に吊るし持ち、長さ約一尺の桐のバチ一本で打つ。入鼓は直径一尺五寸の小太鼓で、白布でからだの前面に吊るし、約一尺三寸の桐バチ二本で打つ。鉦は直径八寸の円形で、左手に吊るし、右手に持った丁字形の撞木で打つ。三種の楽器をもって一組とし、鬼は団扇と色紙を飾りつけた棒を持って先頭に立ち、この楽器の奏に合わせながら数組が一団となる。

演目は「早打ち」「道行き」「せぐり」「鬼の口上」「宮巡り」「鬼おどりうち」「参詣度」「はね歌おどり」「中おどり」「はねこみ」「打合せ」で、全員楽器を打ち鳴らし、はね、舞い、おどる豪快な踊りである。

「道行」は、神社の境内に行くまでの奏であり、「宮巡り」は全員が一列縦隊となって神殿を廻るときの奏、この行事の中で心ともいわれるのは「はね歌おどり」「中おどり」「はねこみ」である。

暑い夏の日が真上から降り注いでおり、日盛り道を雨乞いの踊りの列が白い土埃を上げ行き過ぎた。

六月始めから閏六月。七月と八月と百日余り早天が続いている。備後福山藩の記録には「古老も覚えざる大旱魃。百年以降の大ひでり」とある。

田植えが終わって田の草をとる時が来ても雨が降らなかつたら、科学が幼稚であった時だから雨を乞う呪術が盛んにおこなわれた。備後福山藩領では、古来からこういうときに「はねおどり」を踊った。

管茶山の『備後福山領風俗記』には、

「村の雨乞いは、龍王社の前で行った。竹竿や木綿布や神をつけて職のごとく立てて踊ったが、雨乞を始めめた時も雨の降った時の行事も同様である」と記している。

「はねおどり」という踊りは四人が一組であつて、鬼という名の通りに鬼面をかぶり、紅しぼりの襦袢（シヤツ）をきて、黒い股引きをはき、脇差（小刀）を差し、四人の女竹に赤青の紙を巻いたのと、団扇に色紙をつけてひらめかしたのを持って音頭をとった。

「はねこみ」である。

また一人は四斗樽を脇にはさんだ。別の一人は一尺一寸の小鼓を縄で首にかけて胸のあたりでくりくり、両手にバチを持った。もう一人が鉦と撞木を持った。この四人が一組であった。

(音頭) あら目出度や地からも湧いて  
(一同) 空からも降る  
(音頭) 地から湧いて空からも降る  
(一同) 五穀も稔る  
(音頭) 五穀稔りて豊かな御代や  
(一同) これも世盛り

管茶山の絵は、団扇の代りに扇を、四斗樽の代りに太鼓を持ったのが画いてあるが、いずれも小さな竹皮笠を正面から紐が見えないようにかぶっていた。

団扇を持つ男が、団扇を差し上げて「えいえい、おう」と音頭をとると、鉦・太鼓など持つ男が「さんまいどう」と応えた。それから太鼓・鉦の拍子を合わせて、四回から五回はねまわった。神前に出たら「せぐり」「宮巡り」「さんまいど」の踊りがあって「口上」があった。

目出度やな  
地から生えて空からも降る  
地から生えて舞いの空降る  
国の世栄 空からも降る  
こちらの世栄り こちらの世栄りやの  
奈良から生えて書付をする  
奈良から建てて書付をする

蔵王はね踊りも、当時は雨乞や田んぼの虫追いなどで、打ち鳴らされたものであったが、いつとはなしに鉦と太鼓が組み合わされ、踊りとして完成させ、神社の祭典などで、五穀豊穡を祈る神祇となったと伝えられている。

蔵王はね踊りには、四つの節があり、「せぐり」といわれる踊りを主体として、御輿の途御につけ「道行き」踊り、神社の周りを回る「宮巡り」、そして締めくくりとして踊られる「打ち込み」踊りとなっている。時には急に、時にはゆるやかに、あるいはバチを空に飛ばして宙にうけ、あるときは身体を施転屈曲して跳ね上がり、調律は硬軟よろしく回りながら踊る。

音頭とりは「団扇」を持って、電光石火のごとき早業で目にもとまらぬ激して跳躍を続ける。

汗流は滝のごとく、勇壮愉絶な踊りがつづく。また「せぐり」と「打ち込み」踊りには、「中唄」がはい

り、国と家庭の繁栄を祈る唄としてはね踊りのリズムに合わせ唄われている。十月十九日の秋の前夜祭から二十日（現在は十月の第三日曜日）の本祭には、町内をはね踊りがかけめぐる。

涼やかな秋の朝に、昨日まで聞こえていた蔵王（弥陀）八幡神社の笛や太鼓の音、それに蔵王青壮年による豪壮な、はね踊りの鉦や太鼓の音も、今はこともなく静かに……雲は流され、美しく晴れた空は青く澄んで、白い雲が流れ、その空は高く遠く思われる。

### 新春特別古墳講座

新発見考古速報展95姫路見学会  
「新発見考古速報展」は考古学の最新成果を広く国民に知らせるために本年度より実施されることになった文化庁発案の全国巡回特別展です。

「東京国立博物館」など五会場はすでに終了し、現在「浦添市（沖縄県）美術館」で開催中です。このあと「姫路市立美術館」で本年度最後の展覧会が開催（会期一月九日（火）～二八日（日））されますが、古墳部会では「新春特別古墳講座」として見学に出かけることにしました。

### 『備後古城記』を読む

一二月の「備後古城記を読む」は忘年会と重なるためお休みです。待ち遠しいでしょうが、山城ファンは年明けまで待つて下さいね。

▲実施要項▼  
日程 一月二〇日（土）  
時間 午後七時～  
場所 中央公民館会議室  
座長 出内博都さん  
費用 一〇〇円程度

### 『備後古城記』を読む

一二月の「備後古城記を読む」は忘年会と重なるためお休みです。待ち遠しいでしょうが、山城ファンは年明けまで待つて下さいね。

▲実施要項▼  
日程 一月二〇日（土）  
時間 午後七時～  
場所 中央公民館会議室  
座長 出内博都さん  
費用 一〇〇円程度

☆五種類の異本「備後古城記」実費配布の受付をしますので、希望者はこの日に必ずご参加下さい。

☆五種類の異本「備後古城記」実費配布の受付をしますので、希望者はこの日に必ずご参加下さい。

☆五種類の異本「備後古城記」実費配布の受付をしますので、希望者はこの日に必ずご参加下さい。

申込受付 古墳部会・山口哲晶方  
☎〇八四九一四五一六一七三  
受付日 一月二日・三日（火）  
水）午後八時～九時（時間厳守）  
（注）通常の古墳講座は休止します。

## 湖周の旅

岡本 貞子

秋深き十月十四日早朝、足取りも軽く古戦場を訪ねる旅に出る。少し肌寒く感じたが、いやこれは二三〇メートルの小谷城へ挑戦の熱気が燃える武者ぶるいだと了解する。

新幹線で福山から二時間少しで米原着。ここは上京の折いつも素通りするところだが、駅頭に立つと、少し鄙びた風景が何かしら懐かしい思いを抱かせる。待機している近江鉄道バス乗車、二〇分で古戦場姉川へ着く。

今から四二五年前の昔、この広い流域を血の海となして、つわものどもが戦い、累々の骸をさらした有様はどんなに恐ろしい光景だっただろうか。住民の恐怖が思いやられた。やがて浅井家三代の居城小谷城へ。中でも三代目長政は、武勇の誉れ高く、一六歳で六角氏と、一七歳で斎藤氏と戦い、大軍を打ち破った。織田信長との戦いが始まってより三年間、苦しい籠城生活が続いたが、その間に城塞は補強され、戦国五名城の一つに数えられる堅固な小谷城が仕上げられた。

結局、天正元年盟友である武田信

玄の病気が引き金となり、織田方への内通者や、諜報も盛んとなって総崩れの悲劇となった。

長政の妻、信長の妹お市の方は、娘三人と共に助命されたが、長政は二十九歳で自刃、また長男は十歳で磔の刑に処せられる。

生々流転、現地に立って感無量であった。赤いナナカマドの実が涙にじむ。

だが山王丸で頂いた井筒屋さんのお弁当は、心がこもっていてとてもおいしかった。

郭見学のあと下山、再びバスで彦根城へ。途中佐和山町通過、かの石田三成の居城あとである。

彼は悪名高い秀吉の朝鮮出兵の兵站部一切を引き受けて、苦心遂行した大人物である。領地にあつては善政を敷き、領民から慕われた方であったが、今それを物語る遺物は故意に棄却されて、何も残ってない由、物の本で読んだことがあり、思い入れ深く野山を眺めて通り過ぎる。

やがて彦根城、湖南と湖北の境に立つ天下の要衝である。徳川家は関ヶ原の戦いに功績抜群の井伊直政に与え、將軍自ら十二の大名に応援させて戦略城の名城を構築させた。これには川の流路を変更する工事や、その他、大土木工事

など難工事が山積していて、直政・直勝二代にわたり四〇年の歳月を要したそう。

ゆつたりと品格のある大城とその城下町。古色蒼然の城址の太木、堀の水を見てみると、その昔の中に立っているような錯覚をおぼえる。

天秤檜の下に立って眺めた西の空に、ムクの大木の枝を射通して沈む茜色の夕陽は、さながら大自然の姿そのものであった。

晩秋の暮れていく道を彦根かんばへ。琵琶湖の夜は、さざなみの音も静かで、温泉も旅の疲れを、やさしく払ってくれた。御食事も豊富でわれわれは幸せな夜を、名残惜しく送った。

十五日朝八時半彦根かんば出発、多賀神社へ。

神秘を感じさせるすばらしい大社であった。祭神は伊邪那岐・伊邪那美二神で、延命長寿、縁結びの神として崇められている。天照の親神であり「坊人」と呼ばれる神社の、今のようにいう出張員さんが、社徳と神札をアピールし、宣伝して歩いたので、昔から伊勢参拝に劣らぬ参詣者のある神社である。今は年間三〇〇万人参拝の栄えている神社である。

十時前、一乗谷着。ここは朝倉氏五代の栄華の跡であ

る。奇跡的に残っている広い朝倉館の遺構から、優れた文化圏であったのを知る。

庭園、茶、生花、聞香など、京にも近く、文人の往来があり、又、海にも近く、外国との交易、物資の流通など経済の力が大であったろうと思う。経済力のあるところ必ず文化が栄え、活力が湧く。

このような遺物は殺伐とした物語りの旅のあと、何かほっとするものを感じた。

徳源院は清滝という集落にあって、近江源氏佐々木氏が代々葬られたお寺である。鎌倉から江戸時代まで宝篋印塔が三〇余り、こんなに一カ所に集められているのは驚きであった。子孫の方のひとかたならぬ努力と、先祖尊崇の現れであろう。

このたびの湖北の旅は、古戦場を訪ねる本場に良いチャンスだった。私は今、産土の地で文化を享受し、平和に明け暮れている幸せを、しみじみ感謝せずにはいられない。

楽しく意義のある旅を計画し、実現してくださいました皆様に、心からお礼を申し上げます。

伊吹の尾根に、蜘蛛の糸が光って走っていた晩秋の山々を思い起こし乍ペンをおきます。

# イザナミと黄泉大神

門田 幸男

徹底的に「古事記を読む」講座に出席するようになって、生き甲斐のようなものを感じるようになった。関係諸先輩には感謝することしきりである。

講師の平田氏はよく勉強しておられ、微に入り細を穿つ説明である。そのためか質問があまり出ない。しかし、これではだんだん低調になるのではないかと危ぶまれる。受講者は聞くの一辺倒でなく、前もって読んで疑門点を掘り起こして持参するくらいの努力をしなければ、本当に徹底的に読む事にしつながらないのではなからうか。そこで、僭越ではあるけれども、この場を借りて一つ問題を提起したい。

イザナミはカグツチを産んだあとそれがもとで死んでしまう。あきらめ切れないイザナギが、亡き妻を追って黄泉国を訪問するという話はみなさんよくご存じだろう。その際イザナギは、現世に帰ってくるように訴える。これに対してイザナミは、「黄泉神と相論はむ(相談します)」と答えている。だからこの時、現世に帰られるかどうかの決定権がイザ

ナミにはなかった。換言すれば、イザナミは黄泉国の支配者(黄泉大神)ではなかったである。

ところが、相談に行ったイザナミがなかなか帰って来ないので、待ちくたびれたイザナギが、その姿を覗き見たときから状況は一変する。イザナミは世にも恐ろしい姿に変わっていたのだ。そして逃げるイザナギを追って黄泉比良坂へやって来た時には、イザナミは一日に千人の民草を殺す黄泉大神に変身していたのである。これはいったいどういうことなのだろうか。

平田氏は、変わったという事実について指摘されただけで、その理由については素通りされたが、立ち止まって考える必要があるのではなからうか。私はここは非常に重要な個所だと思っている。そこで、次に吉野裕子氏(民俗学者)の説を援用しつつ、私なりの考えを示したい。

この話を歴史的な観点から推察すると、黄泉国(黄泉宮)と考えると、イザナミは喪屋(殯宮)に籠もっていたことを表現したものである。もう少し詳しく言えば、殯宮を侵すという古代人の実際の経験があつて、この説話はそれを反映したものの(平田説)とする点は私も賛成である。

しかし、この喪屋の中では、イザナギがイザナミが生き返るのを待っていた(平田説)のではなく、結果的にではあるが、むしろ身離すなわち肉が脱落してイザナミが白骨化していくのを、待っていた期間ととらえる(吉野説)べきではなからうか。

イザナミは初め「悔しきかも、速く来ず(残念です。早く来てくださらなさい)」と言っているから、身離はある程度は進んでいたと思われる。しかし、まだそれほどではなかった。この段階では、イザナミは生前の姿をとどめていた。暗くてよく見えなかったのかも知れないが、イザナギは初めから逃げ出したりはしていない。確かに、まだ黄泉大神にはなっていないのである。

ところが、黄泉神に相談に行っている間に相当時間が経ってしまった。ここに至って身離は激しく進み、イザナミの体はもはや後戻りできないほどになってしまった……。

一周忌のことを「身変り」とも言う。完全に白骨化するには一年近い時間が必要である。イザナギが待たされた時間はいはこれくらいであつたかも知れぬ。そうして待たあぐくの果てが、イザナミが黄泉醜女を指揮する黄泉大神に化つてしまつていたということであらう。

とってだし会員情報

CONFIDENTIAL  
備陽史探訪の会  
個人情報が含まれるため掲載できません。

## 戦国夢街道の旅

高橋 光子

紅葉には少し早い秋晴れの米原駅で、末森さんの元氣そうな声が耳に入ってくる。一年半ほど前から米原で仕事をされている末森さんの案内で、さっそく姉川の古戦場へと出発。数万の軍勢が川岸をはさんでの合戦、当時は六月で水量も多かったことだろう。水の流れていない現在の川床を見ながら、四百年前の様子を感じつつ小谷城へ向かっていく。

小谷城は全国で五本の指に入る戦国時代の山城。地元の人々の説明を聞きながら金吾丸へと登る。ここは、朝倉氏の越前と信長のいた美濃とを結ぶ北国脇往還が通っていた小谷山の麓を監視していた所とか。姉川も横山城も、今日はかすんでいいるが、ふだんは琵琶湖も見える。無数のトンボが飛んでいて、背中や帽子にちよこんととまって私たちを迎えてくれる。私の差し出した指先にトンボが止まってくれ嬉しくなってしまう。城内の出入りをチェックしていた番所を始めとして、御茶屋、御馬屋、馬洗池、大広間、本丸、中丸、刀洗池、京極丸、小丸、山王丸など、数多くの当時の郭が破壊から守られた

のは、小谷城攻略の武功として秀吉が拝領したからだろう。二年半後、秀吉は長浜に移り、その際、石塁、城楼、町屋、寺院等も移築して小谷城は廃城になった。戦いの場から遠ざかったためか破壊から守られ、今なお数多くの遺構が残っている。

山頂には一時過ぎに着く。その食事のおいしかった事！  
朝五時に起きて鳥料理を作り、重箱に詰めて持って来て下さった坂本さんのお心づくしに舌鼓を打ちながら、戦国武士になったつもりであたりを見廻す。赤いナナカマドがハッとするとほほ美しい。「小谷の方」と呼ばれていた「お市の方」の目にも映っていたらうか。

小谷城から彦根城へ。この城は江戸時代移封の多かった中で、江戸時代当初から井伊家の城として幕末まで続いた。

表御殿を復元して建てられた彦根城博物館には、豊富な美術工芸品、書、絵画、甲冑、刀剣、茶道具、調度品、能面、能装束、能楽器など多数が展示されている。現代的なイスが備えられた能舞台は表御殿の中央を占めている。藩主の日常生活を営んでいた当時の様子が見事に復元されていた。池泉回遊式の玄宮園、鳳翔台、井伊直弼の生まれた下屋敷、

内濠を通って黒門から天守閣へ、夕日が琵琶湖のはしに沈んでいく。

「元小谷城天守」だという西の丸三重櫓へは残念ながら時間がないので又のお楽しみ。太鼓門櫓、天秤櫓、地藏堂、梅林、大手橋まで来て少し暗くなる。馬屋、佐和口多聞櫓も、直弼が成年時代を過ごした埋木舎も閉館時間を過ぎてしまい残念だった。

中堀・外堀を見ながら宿へ向かう。「彦根かんぼの宿」は琵琶湖湖畔。城郭の若き大先生中井均さんも一緒に夕食。末森さんの引越されたご近所だそうで、話に花が咲いていた。

日が明けてみたら今日も晴れ。伊吹山脈のほうから、修理中の白いシートのかかった彦根城天守閣を朝日が照らしている。

多賀大社は『古事記』にもその名が出て来る古い有名神社。秀吉が母の病氣治癒を依頼し、快癒の御礼に寄進した橋は木で階段が作ってなければ登れない橋だ。「太閤橋」「太鼓橋」の名がついている。

俊乗坊重源が東大寺大仏再建のため、この神社に二十年の延命を祈願し、願いが叶ったという故事に因んだ「寿命石」。旅行に参加されなかった人の分までタッチ。

福山に帰る前住んでいた仙台の先、多賀城市の多賀城跡は家の庭、管理

人と話した草戸千軒……。

越前一乗谷朝倉氏遺跡は四百年以上もそっくり埋まっていた。資料館には、西山光照寺の石仏、火縄銃に関するもの、中国製の葉茶壺、茶碗等々が展示されていたが、彦根城とは時代が違うとは言え、何となく似ているところもある。

上城戸、下城戸の間には、数多くの武家屋敷、寺院、商人、職人達の住む町屋が所狭しと並んでいた様子。復元された武家屋敷・町屋は映画のもの。福山の博物館の町屋より数段上等とは言え、昔は子だくさんだっただろうに、一部屋だけとは何とも……冬は寒く、雪も多かっただろうに昔の人は元氣な人が多かったのか、弱いものは早死にしたのだろうか。一乗谷遺跡のシンボル、唐門をくぐると、義景の墓、湯殿跡庭園、南陽寺跡庭園、諏訪館跡庭園、中御殿跡等が残っている。

最後は婆娑羅大名佐々木道誉の墓のある徳源院。中世の宝篋印塔一八基が上段に並び、歴代の墓三十数基が整然と江戸時代まで並んでいる。バスはハーレーダビットソンに乗った中年ドライバー数人に抜かれながら米原駅へ。楽しい思い出を胸に、皆元気に福山へ帰った。



# 中央アジアの旅紀行Ⅰ

神原 正昭

一九九五年六月、県立博物館主任学芸員、松崎哲氏の誘いにより、シルクロードの旅に出た私達一行一四名（広島一〇名、福山から四名。内女性四名。添乗員含む）。

旅行団の名称「広島シルクロード研究会」。団長は松崎哲氏。

## ▲主な見学場所▼

- ①カザフタン・アルマトイ  
中国国境からわずか西へ一六〇Km。シルクロードの中間点・人口七〇万人。
- ②ウズベキスタン・タシケント  
中央アジアの経済文化の中心地・人口二二〇万人。
- ③ウズベキスタン・フェルガナ  
大宛は良馬を産し馬は血の汗をかく汗血馬の故郷・人口二〇万人。
- ④ウズベキスタン・サマルカンド  
中央アジア最古の都市・人口五〇万人。
- ⑤ウズベキスタン・ブラハ  
サマルカンドと並んでシルクロードに栄えた二大都市、トルクメン共和国と国境の都市・人口二〇万人。

中央アジアの旅メモを資料に紀行文を作成した。

## ときめきの旅立ち

六月十八日十一時、福岡空港ロビーに集合。空港内特別待合室で自己紹介、松崎団長挨拶。

遙か遠い中央アジアに旅立つ心構えを確かめ合う。

十四時発上海經由北京行きで福岡空港を出発。

二〇分ほどして機内食がでる。健康証明書に記入し、ここで時差調整のため時計を一時間遅らす。

十四時四〇分、上海空港に着陸、空港で待機。

十六時上海空港離陸。

眼下に赤黒く濁る揚子江が見える。飛行機は大運河に沿うように一路北京に向かって飛んでいる。

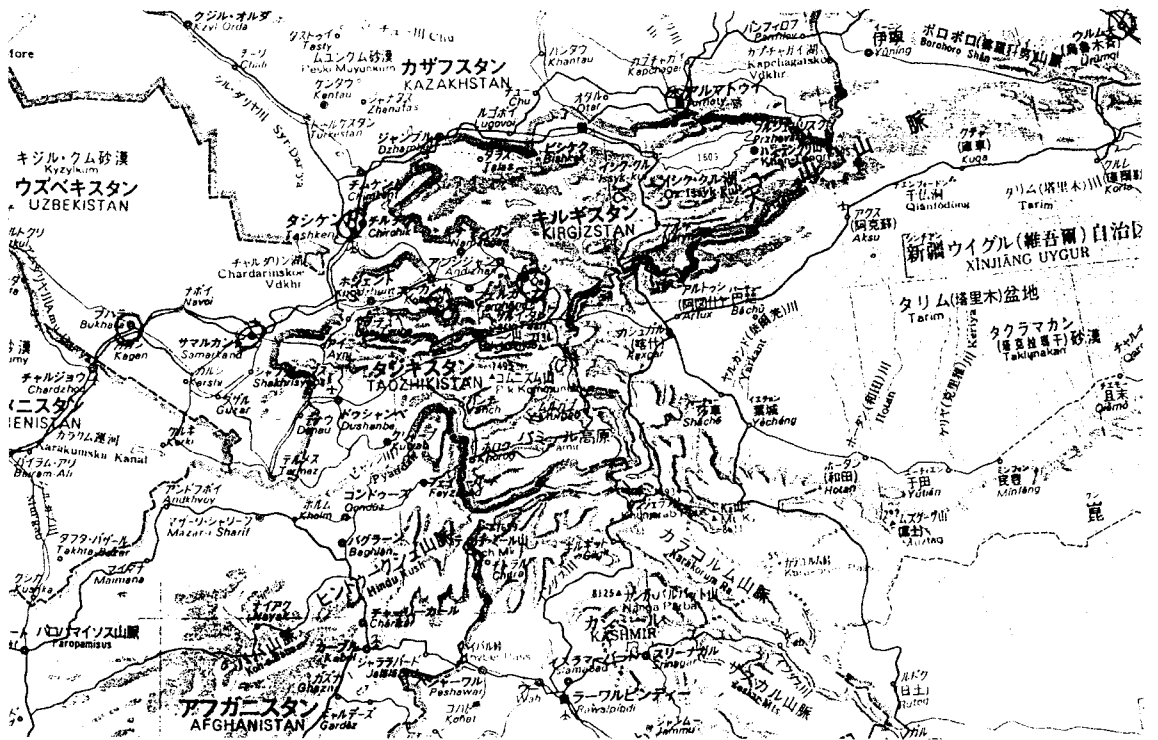
十八時北京国際空港に着陸。ここで中国のガイドと会う（名前は沈さん・男性）。

北京空港内のレストランで夕食を取る。ここでク円クをク円クに千円分だけ両替する（一元〇十円）。

いよいよ中央アジアへ

二二時二〇分北京発で新疆ウイグル自治区のウルムチに向かう。

飛行機は小さく座席は自由。機内は消灯して寒いのでジャンパーを着る。



中央アジアの旅（西アジア東部の地図）

夜中の一時ウルムチ空港着陸。バスでウルムチの町を三〇分走ってホテルに着き、三時に就寝。

我が家を出て実に十八時間かかり、ようやく一泊することができた。

初めての参加者はここで、中東の旅の前途を危惧するものも出る。私もその一人である。ウルムチの深夜の星は射すようである。大陸でなければ見ることの出来ない光景である。私のような野暮な人間でも少なからず感動したものである。

翌日、いや当日六時にホテルのモーニングコール。

六時三〇分トランク搬出。

六時三五分朝食（おかゆバイキング）。七時三〇分ホテル出発。

この間現地では生水が飲めないの湯を沸かしてもらい、個々に持参した水筒に入れてもらう。何と忙しいことであろうか。

空港に行くまでに沈さんの説明あり。ウルムチ市についてメロン、ハミのウリ、トルファンのだウドウ、クチャの美人などと、調子よく名産を上げる沈さんに、ウルムチの一世帯当たりの平均月収はいくらぐらいか？と聞くと約四〇〇元（日本円で四千元）。これでも現地の人の暮らしは結構楽しそうであるように思われた。八時空港着。

ここで初めて荷物の計量。身体の検査をして、待機する。荷物の送付に手間取る。他の乗客もみな同じである。検査が厳しいと思われる。

神々の山、天山山脈

一〇時発の飛行機にのる。

機内は空席が目立つ。飛行機は離陸し一気に上昇する。上空より見えるのは広大な砂漠であり、少しすると機内がざわめく。すると、雪の天山山脈に近づく。四千m以上の雪をいただく山が美しい。天山山脈が手にとるように見える。ある種の神々しさすら感じられた。氷河も真下にあり大パノラマが刻々と移り行く。カメラのシャッターの音が響く。しばらくして水やビールが配られる食事となる。機内食としては思ったより良い。

国境線を通過するのか、三角形をした一層高い山が見える。松崎団長の説明によると七千mあるとのこと。ここでは米河が見える。機内では水は天山氷川水であった。

また、上空よりカザフスタンのイシク、クル湖が見え、三蔵法師が通ったことでも有名な温泉が沸く熱海と言われるところも上空から見ることができ、団員一同感激したものである。

あと少しで最初の見学地アルマト

イである。どんな所かと心の中で色々想像してみる。

十一時三〇分カザフスタンの首都アルマトイ空港に着陸。空港の四方は高い山に囲まれ、その山の上は雪をいただいた美しく、また、静かなところである。

トラブル発生

団員一行は空港内の一室に入れたまま、まるで時が止まったようである。色々聞いてみると、入国の係担当者がいないとのことであった。カザフスタンの首都で、しかも国際空港で入国の担当者がいないようなことは日本人の私たちには考えられない事である。

室内は暑く、椅子一つない。コンクリートの床の上に座って待つこと三時間あまり、ようやく事態が動き出す。

空港で厳しい検査を受けてようやく出してもらった。まだ元ソ連邦領下の特性は残っている。

再び時差調整のため一時間遅らす。

アルマトイについて

ここからモスコウから来た通訳のオリガさん（女性）、この人が今後中央アジアの旅に付き添ってくれる。アルマトイのガイドはカリマさん（女性）。カリマさんが説明してオリガさんが通訳する。

（左写真 通訳オリガさん）



アルマトイは、独立する前は、アルマター（「リングの父」という意味）と言っていた。

十四時にホテルに着くと、東南に雪を頂く山が見える。手を伸ばせば届くほど近くに見える。それでも七〇km程あるが、空気が澄んでいるのか近くに見える。

さっそくホテルのレストランでカザフスタンでの初めての食事を取る。ロシアでは昼食が最も盛んである。

食事の内容と町並

野菜・キュウリ・トマト・スープ・マトンの団子・マトンの薫製・サラミ・ギョウザ・骨付きマトン・パン・菓子・紅茶・炭酸水・ビールはオーダー……

と、今後はこんな料理になるのだろう。カザフスタンの一般的な食事である。味は自分で調節する。とい

つてもテーブルの上にあるのは塩とコショウの二種類である。

食事が済み、三〇分ほど休んでバスでホテルの近辺を回って見学する。アバヤー大通り・大統領のオフィースと、回って感じた事はまだこの国ではレーニンが生きているという事である。市の中心部にレーニン通りなど、レーニンの名の付いたものが所々見られ、レーニンの銅像もまだ立っている。

また、とにかく緑が多く、碁盤の目のような町である。町の規模が大きく、どこも同じように見える。

町の見学も終わり、ロビーで部屋割り、全員五階である。早速エレベーターで自分の部屋に行くが、日本のエレベーターのようにキチンと廊下止まる確率は低く、廊下と段差が一〇cmくらいある場合がある。自分の部屋に行き十九時まで自由行動であるが、部屋にいてもクーラーが無いので暑い。

**日本人記者と邂逅**

ロビーで休んでいたところ、朝日新聞の人が私が広島国体の団扇を持っていたので日本人だとわかり、色々と話しかけてきた。

この人達はウルムチより車で天山山脈を通って来たとのこと。途中検問にかかり厳しい取り調べを受けた

とのことである。

私は「貴方がたマスクミ関係の人でもそんなに検査が厳しいのですか？」と聞いてみると、やはり「この国では、まだレーニンは生きている」と言っていた。

十九時二〇分夕食。

トマト、キュウリ・マトンのソーセージ・メインディッシュは川魚の焼き物・香菜・ポテト。

中東での最初の夕食とのこと、添乗員の平井氏が挨拶乾杯、夕食後雑談。

**再び町並を散策**

七人で町へ出てみる。個人行動は危険である。町は静かで人通りも少ない。

シシカバブー（羊の肉を串に刺して焼いた物、今後の旅に良く出てくる食べ物）を食べた。一ドルで七人が味見をするには丁度よい量である。物価は安く、一例としてバザールでサクランボが大きいナイロン袋にいっぱい入ったのが一ドルであり、これには全員がびっくりした。日本に帰ってスーパーで見たとくろ三〇〇四〇粒入りで四〇〇円であった。

**本格的な見学開始**

この日は早く就寝する。二三時。翌日の朝、ホテルのバルコニーから見える南の景色は雪山が朝日に映え

て美しい。目覚めに良いものを見た。今日一日気分爽快であるように思う。

朝食はバイキング。これから本格的に博物館などを見ることになる。一〇時、徒歩でホテルを出てロシア正教の寺院に着く。

寺院の前には多くの市民が寛いでいる。ロシア色がまだ抜けていない。次にポニセニア教会へ。

ここは、一九七二年に建てられた耐震の木造建築で、内部に入ると、美しく荘厳なものには驚く。

次に戦勝記念碑に参拝する。一九四一〜一九四五年のファシストの戦いに、この国の出身者が二八名戦死

している。戦争犠牲者に対する思いはどの国も同じであるように思う。

ここで一行はバスに乗りして遊牧民の生活を見に行く。バスは南の山の方に向かって進んで行く。大通りは幅七〇mで並木は片側三列もあり、信号は見当らない。

標高七〇〇mまで一気に登ると美しい山が見えてきた。四五〇〇mのアバイ山である。空気がきれいなので保養地として別荘が幾つも見られる。共産党の偉い人が使用しているとのことであり、何処の国も同じである。



(上写真 ポニセニア教会)



(写真上 ユルタでの食事)

### ユルタでの食事

山の中腹にある遊牧民の村ユルタ（パオ）の村に着く。一つのユルタに入って、ユルタの生活の説明を聞くと、ユルタは外は羊やラクダの毛でできており、内装はカーペットなど、冬暖かく夏涼しい。また、冬は山の谷間に移動する遊牧の民の生活に適するようにできている。時には国を越えて移動することもある。移動には馬が使用される。

ユルタは女性の持ち物であるが、家族構成は一夫多妻で、ユルタを組

み立てるのに、女性三人で約一時間程度掛かる。

部屋の中に置いてあるのはドンブランという楽器だけであり、家具らしきものは見当たらない。

十三時三〇分食事をすする。ユルタに移動する食事は豪華である。また、ここで東京から来た観光グループと会う（十五名）。

露店で琥珀と銀の飾り物を買う（五ドル）。

十五時一〇分グルメに満足してユルタを出発する。

(続く)

### 掛迫六号古墳測量開始

一〇月二二日からスタートした雑木・下草伐採作業も、会員の皆様はじめ多くの方々のご協力のおかげで一二月二日に無事終了致しました。

これを受けて一二月二日より、篠原さんの指導の下、測量が開始されました。第一回は測量の起点となるクイ打ちがして行なわれ、その後起点間の測量が実施されました。

また、同時に古墳の分布調査のための草刈りも実施されました。

今後の測量は、左記の通り年内二回、年明けに七回実施の予定です。

皆様のご参加をお待ちしております。

① 一二月一〇日(日)

② 一二月一七日(日)

(午後一時～午後四時)

③ 一二月一四日(日)

④ 一二月二一日(日)

⑤ 一二月二七日(土) 注意!

この日は大阪から専門家を招いて磁気・電気探査を実施します。滅多に見学できません。ぜひお越し下さい。

⑥ 一二月四日(日)

⑦ 一二月一一日(日)

⑧ 一二月一八日(日)

⑨ 一二月二五日(日)

①と③～⑨午前一〇時～午後四時

### 新入会員紹介

皆様のおかげで会員数は二四〇名に達する勢いです。新たに次の方々が入会されましたのでご紹介します。

CONFIDENTIAL

備陽史探訪の会

個人情報が含まれるため掲載できません。

## 虚構と真実

平田 恵彦

私が中学生の頃、国語の教師がさも憎々しげに「井伏鱒二はウソつきだ」といったのを覚えていた。「騙された」ともいつていた。この教師が上京した際、小説の舞台となった早稲田界隈を歩いたところ、書かれていた情景とまったく違っていたから、とその理由をいった。当時私は、時代が違っているからでは……と思ったが、教師の憤慨する気持ちもわからないではなかった。

しかしいうまでもなく、小説は事実をありのまま書くものではない。小説の「早稲田」と実際の早稲田が違っているもなんら不思議ではない。むしろこの教師の考え方のほうがピントがずれているのである。

以前私は雑誌に小説を書いてきたことがあり、その頃、読んで下さった人に「平田さんて、あんな人だったんですか」といわれたことがある。「あんな」は、むしろ良い意味ではない。

似たようなことを母にもいわれた。主人公が子供の頃、その母親が不倫をしていた、という一人称の話を書いたら、「わたしはそんなことをし

た覚えはない」と真顔で怒ったのである。

ともあれ、小説家の多くがペンネームを使う理由は、こういうところにあるのかもしれない。

最近「私の好きな歴史・時代小説作家」という会のアンケートが来たので、さっそく五人書いて出した。

そこで、ふりかえってみると、時代小説は虚構と知りつつ読んでいるが、歴史小説になると、私自身、書かれてはいるすべてを事実と受けとてしまうようなところがある。

実際、ある作家の作品など、学者が舌を巻くほど調査や取材をした上で書かれており、どこまでが事実で、どこからが創作なのかよくわからなものである。だが、よくよく考えてみると、たとえば、戦国武将の会話などは細かいところまで残っているはずがなく、創作であるに決まっている。要するに、私たちは気持ち良く騙されているだけである。

ただ、この「気持ち良く」ということが大切で、下手な作家の作品を読まされると、とても不快な気分になる。そして、ひとたびこういう気持ちを経験すると、小説など二度と読むものか、という気になってしまふこともあるようだ。時に「小説のたぐいは一切読まません」とおし

やる方に会おう。私などは、何ともつたない、と思うのだが、皆さんはいかがだろうか。

何の自慢にもならないが、私は学生時代、本だけは人より多く読んだほうだと思う。大学時代は一日三冊、四冊という日も珍しくなかった。もちろん講義をさぼってひたすら読むのである。この頃とくによく読んだのは、SFや推理小説で、恋愛小説などはそれほど読まなかった。

ところが、そうしているうちに、なぜかわからないが、小説を読むと吐き気がするようになった。それなのに活字を読みたいという気持ちは強いのである。けれども小説を読むと苦しくなり、どうしても読み続けられなくなる。一種の精神病である。

しかたがないので、私は科学ものの解説本やエッセイを読むようになった。講談社のブルーバックスなどは手当たり次第に読んだし、岩波新書、中公新書なども分野を問わずよく読んだ。頭を休めるために雑誌の広告も読んだ。「ローリングス」の比較的長い宣伝文など、いまだに暗記しているくらいである。それから女性誌の広告も勉強になった。キャッチコピーだけでなく、説明文を細かく読むと新しい発見がいっぱいあり、男性誌にはない面白さがあった。不

思議なことに、こういうものだと思っても少しも吐き気がしないのである。こんな状態が一年ほど続いた。

私が再び小説を読めるようになったのは、友人からある作品を勧められ、その本を読んでからである。それまで何度か小説に挑戦して駄目だったのに、この作品はあつという間に私を虜にした。

それが中井英夫『虚無への供物』である（いま講談社文庫から出ている）。ジャンルからいえば、探偵小説といふべきなのだろうが、そういう範疇を超えてしまった、恐るべき小説である。皆さんの中で、かつての私のような「ビョーキ」の方が、もしいらしたら——いるわけがないが——ぜひこの本を「クスリ」にするようお勧めしたい。

さて実は、右に書いたことは厳密にいうと事実と反する。小説が読めなかった時期に読んだ小説があった。唯一の例外、それが先ほど「ある作家」と書いた司馬遼太郎である。

歴史小説では「事実」を書くことは確かに大切だが、たとえ「虚構」であっても「真実」を描くことは、もつとずっと大切である。

どうやら私は彼の小説を、歴史の「真実」を描き切った「ノンフィクション」として読んでいたようだ。

# 備陽史ブツクレビュー

## ① 征西府秘帖

森本繁著 学習研究社 一八〇〇円

今回は何はにおいてもこれを取り上げるべきだろう。郷土史家の森本さんが学研主催の第二回「歴史群像大賞」を受賞され、出版されたのがこの本。ただし歴史の解説書ではなく、長年のテーマである村上水軍の知識を活かした時代小説である。福山から全国的な歴史・時代小説作家が誕生したことを祝福したい。

山陽新聞社から同じ著者の『備後の歴史散歩(上)』(一六〇〇円)も出たが、内容はともかく、装丁が全く山川出版社の物まねなのは頂けない。評者は編集者の見識を疑う。

## ② 隆慶一郎全集

隆慶一郎著 新潮社 四八〇〇円

数年前、初めて隆慶一郎の『吉原御免状』を読んだとき、ぶっ飛んだのを覚えている。すごい作家が登場したと感動したものだ。時代伝奇小説でこれほど興奮したのは松本清張の『西海道談綺』以来だった。

池波正太郎が亡くなったときもショックだったが、隆が早逝してしまつたことが評者は悔しくて仕方がない。司馬遼太郎や藤沢周平にはぜひとも長生きをしてもらわなくては。

この全集の巻末に網野善彦が「隆慶一郎とその世界」という一文を寄せている。隆は網野の学説を取り入れて書いていた。網野はそれを人から知らされて読むように勧められたが、隆が亡くなるまで読まなかった。

「しかし読みはじめて、私は本当に心底から驚いた。面白さにひかれて読み進むうちに、私の拙い考えが恥ずかしく、冷や汗の出るほど引かれた個所に突き当たった」

生前に隆と会わなかったことを網野は心から後悔したという。

この第一巻には「吉原御免状」と「かくれさと苦界行」の二つの長編、「寛永御前試合」など八つの短編が収められている。この値段でも断じて安い。隆慶一郎を一度も読んだことのない人は絶対に買うべし。

## ③ 倭人の登場

森浩一編著 中央公論社 一二〇〇円

シリーズ「日本の古代」の第一巻。ハードカバー版が手に入りづらくなっていただけに、まさに待望の文庫化といっていいたいだろう。

この全集は日本の古代史を総括的に学習するには絶好の書、真剣に勉強しようとする人にはもってこい。第二巻以降も毎月刊行される。評者はハードカバー版を持っているが、文庫版も買うつもりでいる。

## ④ 三国志の風景

小松健一著 岩波新書 九五〇円

新書版だが、カラーページが多く、しかもアート紙を著っている。この値段は安いといわねばなるまい。

『三国志』ファンは買いたいが、たえそうでなくても、写真を見ているだけで十分楽しい。

## ⑤ クロニク 戦国全史

講談社 一四八〇〇円

一四四四年の享徳の乱から一六一五年の元和偃武までを年代順(クロニク)にまとめた七九九ページの大作。読み応えは十分で、自分の間愉しめる。ほとんどがカラーページで凶版も多数、戦国史ファンは随喜の涙を流すに違いない。が、問題は値段。清水の舞台から飛び降りたい人にお勧めしたい。

## ⑥ 将軍と側用人の政治

大石慎三郎著 講談社現代新書 六五〇円

NHKの大河ドラマ「八代将軍吉宗」では、冒頭の綱吉の時代に側用人、間部詮房が活躍。今は有馬氏倫・加納久通(名称は御側御用取次)が大活躍し、田沼意次も登場する。

この本によると、綱吉から家茂の代まで実に三〇人の側用人がいるという。その中で真の意味での側用人政治を行なった、先の四人に光をあて、今まであまり知られていないこ

の政治システムについて論説する。とくに田沼意次が「悪玉」という歴史的評価については、強く再検討をせまっておき、評者を喜ばせた。

なぜなら評者は熱愛書「劍客商売シリーズ」を読み、三冬の父である田沼の「善玉」説を信じているからである。三冬の父が悪者であるはずがないではないか！言い換えれば、これが池波正太郎の田沼に対する人物評価であって、もちろん評者は断固これを支持する。

というわけで、吉宗の時代を新たな視点で見直したい人にぜひお勧めしたい。なお、講談社学術文庫から同じ著者の『徳川吉宗と江戸の改革』(八四〇円)も出ているのでこちらも併せて読むとよい。

## ⑦ 北のまほろば

司馬遼太郎著 朝日新聞社 一七〇〇円

最後はやっぱりこれにした。「街道をゆく」シリーズは今年で二十五年目。昭和四五年九月二五日に第一巻が出版され、値段は四八〇円。この初版本はいまでも大切に持っている。評者は司馬遼太郎の著作では、小説を含めてもこのシリーズが一番好きである。須田勉太が亡くなってややパワーダウンしたが、それでも出ると買わずにいられない。同じ思いの人も多いのではなからうか。

## 事務局日誌

一〇月三日・四日(火・水) 田口会長の母堂和子さんの通夜・告別式。多数の会員が列席。合掌。

一〇月七日(土) 古墳講座Ⅱ「古墳に納められたものⅡ」参加一二名。次回から時間が昼に変更に。

一〇月一三日(金) 七時役員会開催。参加一〇名。一泊旅行の資料作成。来年度行事・古墳測量調査・役員人事等について打ち合わせ。

一〇月一四・一五日(土・日) 一泊旅行「秋天に戦国の残光を求めて」参加四三名。近江ではそれまで五週連続して日曜日雨が雨だったとのことですが、この二日は快晴。われわれの思いが天に通じたのでしよう。坂本さんが大量の差し入れを持参して下さいました。ありがとうございました。

宿泊所の設備と食事は今までの中で最高との感想もありました。

一〇月二一日(土) 二時から「古事記を読む」参加二二名。学習を開始してからちょうど一年が経過、当初の予想よりはるかに多くの方がご参加くださり感謝しています。神谷さんが江戸時代の『古事記』本を持参。全員興味津々で拝見。★七時から「備後古城記」を読む。

参加一五名。小林浩二さんが「備後古城記」の異本を持参。全員羨ましそうによだれをたらしておられました。

★山陽新聞が広域版で「掛迫六号古墳の測量調査明日から開始」と大々的に報道。

一〇月二二日(日) 掛迫六号古墳の雑木・下草伐採開始。なんと二十七名の方が参加してくださいました。本当にありがたいことです。内田さんがチェーンソーを持参。強力な助っ人になりました。今村さんがビールを差し入れ、大歓声。

一〇月二四日(火) 中国新聞が「掛迫六号古墳の雑木・下草伐採開始」記事を報道。

一〇月二八日(土) 第九回郷土史講座「積石塚の謎に迫る」開催。講師は山口哲晶さん。参加一八名。秋の古墳巡りの予習として実施。

★夜から役員会。参加一三名。忘年会・来年度行事・古墳調査・役員人事などについて話し合いました。

一〇月二九日(日) 引き続き掛迫六号古墳の雑木・下草伐採。二二名が参加。この日のチェーンソーは内田・前原・井村さん。作業が大いに進み、刈り取りは八割方終了。今村さんが再びビールを差し入れ。後光がさしていました。

一〇月四日(土) 古墳講座Ⅲ「石棺と木棺について」参加一四名。今回から時間が午後二時に変更。

一〇月五日(日) 引き続き掛迫六号古墳の雑木・下草伐採。参加二六名。この日は刈り取った雑木の搬出作業が中心。チェーンソー二台が大木の分割に大活躍。坂本さんが豚汁を寸胴に入れて差し入れ。その美味しさに一同絶句。一泊旅行の鳥料理といい、仕事を間違われたのでは？杉原外志子さんからもクッキーが届きました。

★雑木・下草伐採の様子をRCCテレビが取材に。夕方と翌日早朝のニュースで報道。神原正昭さんや網本さんが大アップで登場。

一〇月一一日(土) 二時から「古事記を読む」参加二四名。ようやく三貴子が登場し、とくにアマテラスについて学習。

★終了後、会報六七号の発送作業をお手伝いいただき。参加六名。

一〇月二二日(日) 引き続き掛迫六号古墳の雑木・下草伐採と搬出。二三名参加。チェーンソー二台。この日をもって伐採と搬出作業は終了。予定よりも三回も早くできたのは皆さんのご協力の賜物です。佐藤秀子さんがみかんを差し入れ。この日までの皆勤賞は中村・神原・

内田・矢野・平田さんでした。一〇月一八日(土) 「備後古城記」を読む。参加一二名。小林浩二さんが「備後古城記」の異本を五種持参。希望者には実費で配布することに。於市民会館会議室。

一〇月一九日(日) 秋の古墳めぐり「積石塚の謎に迫る」参加五五名。石清尾山古墳群は山頂尾根沿いに展開。山城と同様急坂を登るのが大変でした。でもそのかいあって見事な積石塚古墳に歓声があがりました。会長は石棺の石枕が気になるらしく「生々しくて気持ち悪い」を連発。

また、富田茶臼山古墳では地元大川町の発掘調査員の方が説明をしてくださいました。

最後は善通寺郷土館と王墓山古墳。福山へたどり着くと真暗でした。

一〇月二三日(木) 「蔵王町の史跡めぐり」下見。柿本・黒木日出人・平田さん。史跡がたくさんあるのでコースを調整することに。

一〇月二五日(土) 第一〇回郷土史講座「地名が語る郷土の歴史」講師は出内博都さん。綿密な論考に参加者(三二名)からため息が。

(注) 各種講座・役員会の会場はとくに断わりのない場合、中央公民館会議室です。

### 速報 福山文化賞受賞

福山市で文化活動に功労のあった個人・団体に授与される「村上カヨ記念基金条例に基づく顕彰」をわが備陽史探訪の会が受賞しました。われわれの地域に根差した地道な活動が評価され、福山市教育委員会の推薦を受けて受賞が決まったものです。

一二月二日(土)、松浜町のリデンローズで受賞式を挙行。会を代表して田口会長が出席し、三好福山市長から表彰を受けました。

昨年の「広島文化賞」受賞同様、これを励みにしてますます会の活動を活発化していきたいと思えます。

### 田口会長が書籍を上梓

『備後ゆかりの歴史人物伝』がこの一月中旬発行されます。

これは田口会長が「福山リビング」に三年間連載し、好評だった記事に加筆したものです。

発行所は「福山リビング新聞社」で、定価は一八〇〇円、啓文社をはじめ一般書店で発売されます。

また、われわれの会の行事でも発売し、その収入については会の活動資金となりますので、ぜひお買い求め下さるようお願いいたします。

### 平成八年度総会・新年会速報

#### 記念講演会講師決定!

来年のことを今から...という気もしますが、備探の会は速いのが取り柄。平成八年度総会・新年会の日程が決まりましたのでお知らせします。

#### ★平成八年一月二八日(日)

実をいうと日程しか決まっています。それでも速報したのは訳があります。総会記念講演で特別講師をお願いしたので。

西口和彦先生(兵庫県教育委員会

理文事務所調査第一班長)です。先生のご専門は埋蔵文化財の電気・磁

気による地中探査で、実は今回の測量調査にもご協力頂けるのです。

あの島根県の荒神谷遺跡で、銅鐸・銅矛が発見されたのは、地中探査が

きっかけとなったことはあまりにも有名です。しかし、考古学の最先端

のこの技術について、われわれはよく知りません。それもそのはず、この技術を駆使できるのは、兵庫県でも西口先生だけ、全国でも数えるほどののです。それだけに価値ある講演になると自負しております。

演題は「考古学的な地中探査について(仮題)」です。会員の皆様には万難を排してご出席頂くようご案内いたします。

### 訃報

#### 藤村良輔氏 (ふじむらりょうすけ)

一〇月一〇日午後一〇時二十八分、福山市市民病院にて逝去、六十二歳。笑顔が魅力的な方でした。旅行会員を自称され、昌子夫人とともに山陰杉原盛重紀行に参加されたのが、つい昨日のことのように思い出されます。 合掌。

#### 武島リカヨさん (たけしまりかよ)

一月九日午後一〇時、県立神石三和病院にて逝去、七十六歳。夫君故武島種一氏とともに草創期の会を支えて下さいました。来年はまた元気で参加したいと言っておられたのですが……。 合掌。

### 会報69号原稿募集

「備陽史探訪」69号の原稿を募集します。随筆、短歌、俳句、マンガ、歴史に関する小論など何でも結構ですが、予算上の都合や記述内容の問題で掲載できない場合があります。

タイトル・氏名別で、本文を縦書き一六字×(四〇〇)字詰原稿用紙の場合、下四字を空けて使用。厳守。

二四〇行以内で書いて下さい。×切りは一月二〇日(土)事務局へ。

### 編集後記

☆「山城志」の発行が諸事情により遅れます。会員の皆様にはご迷惑をおかけいたしますが、ご了承下さい。来年一月下旬か二月初旬には発行できそうです。

☆あつという間に年末になったという感じですが。編集子にとって公私ともこの一年はとにかく多忙でした。ちよつと振り返ってみただけでも、一五周年記念行事の運営、「山城探訪」の調査・執筆・販売、毎週の各種講座の実施運営・会場手配・講師バス・徒歩例会・一泊旅行の運営・講師 掛迫六号古墳調査の諸行事の運営・雑草伐採・測量参加、対マスコミ情宣活動、会の運営費の一部管理、各種印刷、行事案内の作成、そしてこの会報や「山城志」編集等とそのすべてに何らかの形で関わっております。仕事も二つもっており

ますので、数ヶ月にわたり睡眠時間が三、四時間(今も)ということがあり、正直なところかなり疲れました。会長にお願いして来年からは少し楽をさせて頂くつもりであります。(警座亭主人)

備陽史探訪の会事務局 ●七二〇

福山市多治米町五一一九一八

☎〇八四九(五三)六一五七